

# 平成 11 年度の漁況

安木茂・道根淳・池田博之・由木雄一・村山達朗

## 1. まき網漁業

### (1) 漁獲量の経年変化

図 1 に 1963 年（昭和 37 年）以降の浜田港のまき網漁業における主要 5 魚種の漁獲量と CPUE（1 航海あたり漁獲量）の経年変化を示す。1999 年（平成 11 年）の漁獲量は 20,624 トンで、過去 36 年間で

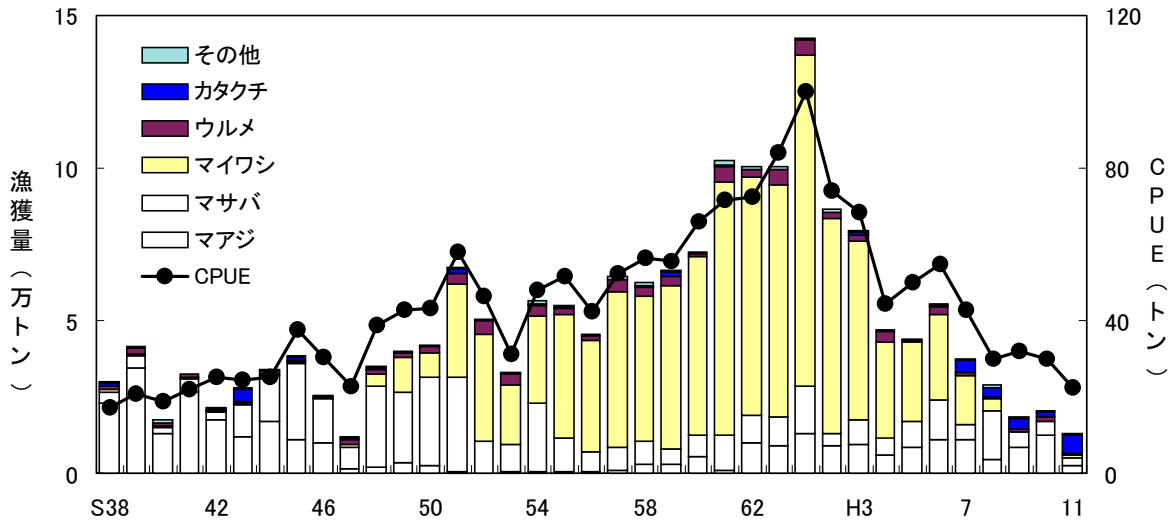


図1 浜田港所属の中型まき網船による魚種別漁獲量とCPUEの推移

2 番目に低い値となった。浮魚類の漁獲量は 1989 年をピークに減少傾向で、その主な要因としてはマイワシ資源の減少、マアジ・マサバ等マイワシに替わる魚種の漁獲の伸び悩みがあげられる。1999 年はカタクチイワシが増加したものの、マアジが前年に比べ大きく減少した。

### (2) 魚種別漁獲状況

図 2～6 に浜田市漁協所属の中型まき網によるマアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシの漁獲量の平年値（過去 5 ケ年平均）、1998 年及び 1999 年の季節変化を示す。

#### マアジ

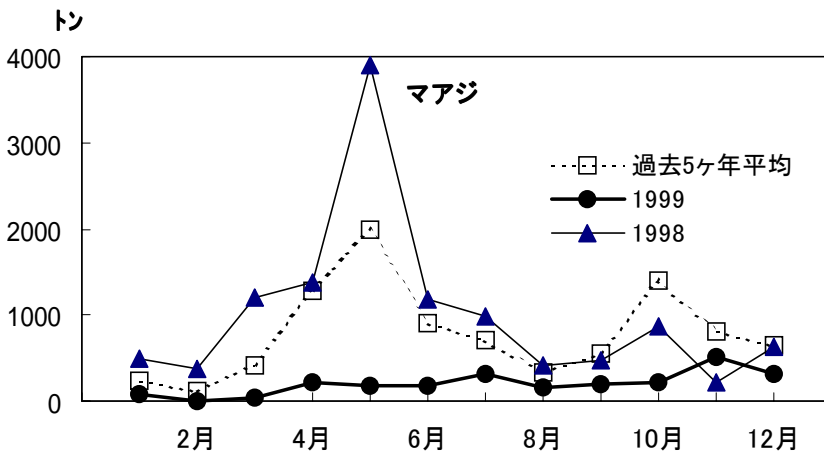


図 2 浜田の中型まき網によるマアジ漁獲量

1999 年の総漁獲量は 2,424 トンで平年の 26%、前年の 20% となり、平年・前年を大きく下回った。春から夏にかけては尾叉長 16～18cm 程度の 1 歳魚（1998 年級）が、秋から冬は 9～15cm の 0 歳魚（1999 年級）が中心であった。

5 月を中心とした春から初夏および 10 月を中心とした秋に見られる漁獲のピークが見ら

れず、年間を通して低調な漁模様であった。1998 年秋の 0 歳魚（1998 年級）の漁獲が低調で、そのまま 1999 年春～初夏にかけて 1 歳魚の漁獲が低調に推移したと考えられる。また、0 歳魚（1999 年級）の来遊量も低水準で夏以降の漁獲も伸びなかった。東シナ海から日本海南西部にかけての海域でも春～初夏にかけてのマアジ 1 歳魚、秋のマアジ 0 歳魚の漁獲は伸び悩み、対馬暖流域全体でのマアジ資源水準も低調であったと考えられる。

### マサバ

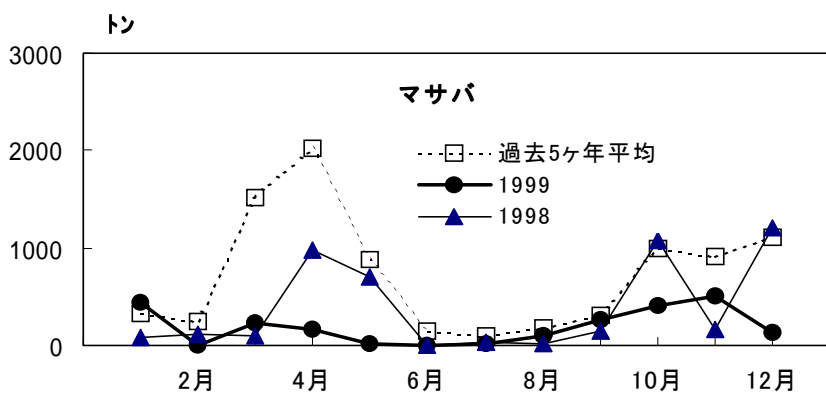


図 3 浜田の中型まき網によるマサバ漁獲量

1999年の総漁獲量は2,236 トンで平年の 26%、前年の 49% となり、平年・前年を下回った。漁獲の主体は尾叉長 25cm 前後の豆サバ(0~1 歳魚)が主体であり、2 歳魚以上の漁獲は少なかった。例年見られる春と秋の漁獲のピークは見られず、年間を通して低調に推移した。

### マイワシ

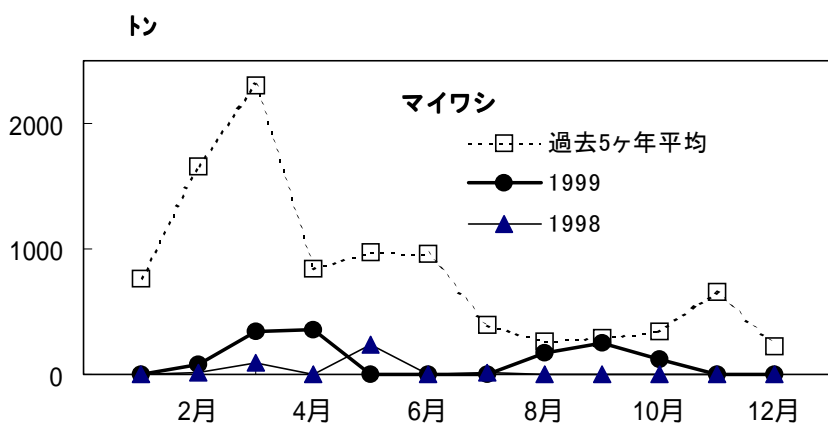


図 4 浜田の中型まき網によるマイワシ漁獲量

1999 年の総漁獲量は 1,318 トンで平年の 14%、前年の 371%であった。平年と比較すると依然として低い水準であるが、前年と比較すると減少傾向はおさまったように見える。漁獲の主体は小羽・中羽イワシであった。全国的にマイワシ資源の減少が叫ばれて久しいが、低水準状態であるものの、沿岸海域では局所的にややまとまった漁獲が見られるようになった。

### カタクチイワシ

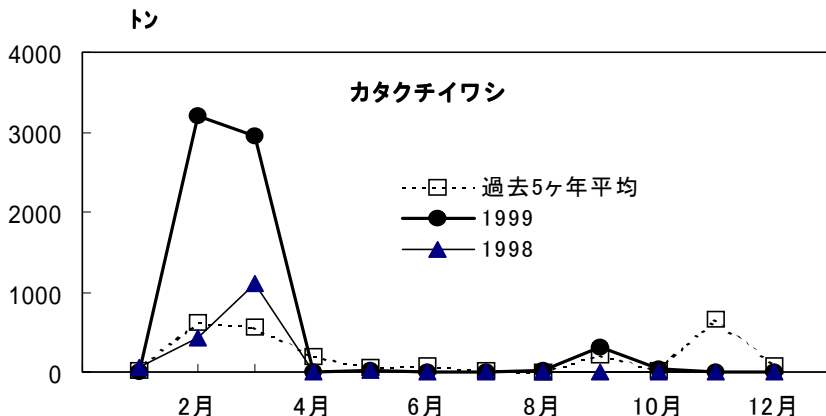


図 5 浜田の中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量

カタクチイワシは 1995 年以降、冬期を中心として、3,000 トン～3,500 トンの漁獲があり、漁獲量が激減したマイワシを少ないながら補っている魚種の一つである。

1999 年の漁獲量は 6,514 トンとなり、平年の 2.5 倍、前年の 4 倍と非常に好調に推移し

た。漁獲の季節変化を見ると、2~3月に漁獲のピークが見られ、例年のような秋のピークは見られなかった。対馬暖流域全体での資源水準は多少の増減があるもののしばらくは高い資源水準を維持するものと思われる。

ウルメイワシ

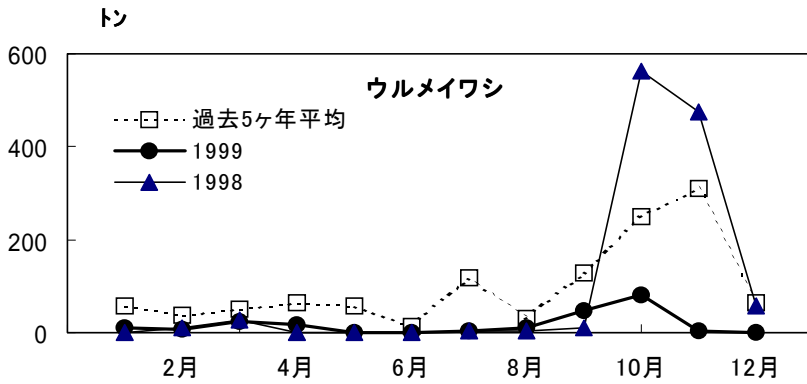


図 6 浜田の中型まき網によるウルメイワシ漁獲量

ウルメイワシは、島根県沿岸域での漁獲量はそれほど多くないが、年変動が比較的少なく毎年 200~500 トン程度の漁獲がある。1998 年の漁獲量は 205 トンで平年の 17%、前年の 18%と不漁であった。特に、10~11 月にかけての漁が極端に不振であった。

2. イカ釣り漁業

(1) スルメイカ

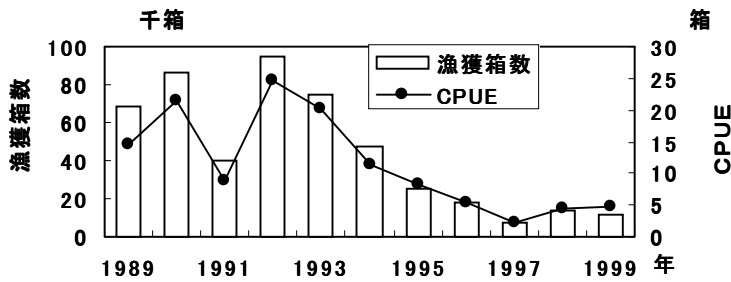


図 7 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲量およびCPUE

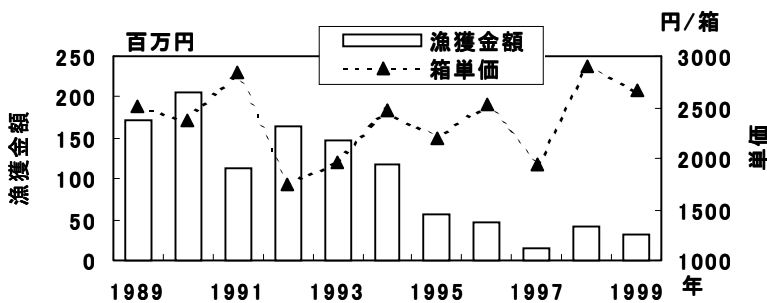


図 8 浜田地元小型船によるスルメイカ漁獲金額および単価

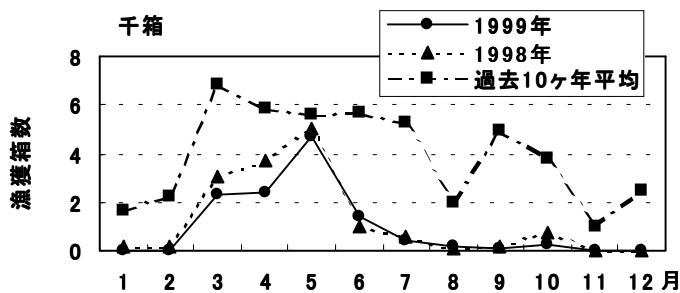


図 9 浜田地元小型船によるスルメイカの月別漁獲量

1999 年の島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるスルメイカの漁獲動向を図 7~9 に示す。1999 年のスルメイカの漁獲箱数は 11,724 箱で、前年 (14,028 箱) の 84%、平年 (47,457 箱) の 25%と低調に推移した。CPUE (1 隻 1 航海あたり漁獲箱数) は 47 箱で、前年 (43 箱) の 110%、平年 (12.6 箱) の 37%と前年は上回ったものものこちらも低い水準で推移した。漁獲金額は 3,131 万円で、前年 (4,069 万円) の 77%、平年 (1 億 739 万円) の 29%と低調に推移した。単価は 2,671 円/箱で、前年 (2,901 円/箱) の 92%、平年 (2,351 円/箱) の 114%とほぼ平年並みで推移した。単価は若干の変動はあるもののほぼ 2,300 円/箱前後で推移している。

近年、スルメイカの漁獲箱数、漁獲金額ともに 1990~1992 年をピークとして減少傾向にあり、最近は低水準で横ばいに推移している。月別

の漁獲状況を見ると、1999年の3～5月は平年には及ばないもののほぼ前年並の漁獲が見られたが、7月以降はほとんど漁獲がなかった。近年、日本海のスルメイカ資源は高水準であると言われているが、日本海北部海域では比較的好漁が続いているのに対し、日本海西部海域での漁獲は低い状態が続いている。

(2) ケンサキイカ

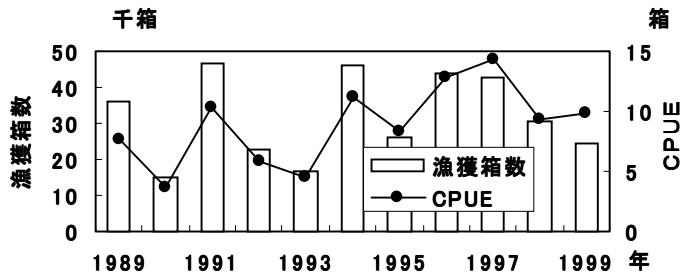


図10 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲量およびCPUE

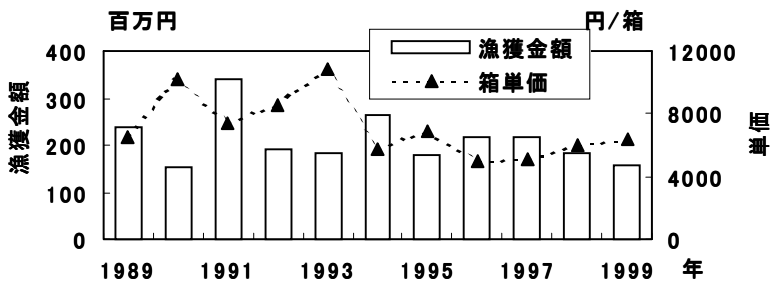


図11 浜田地元小型船によるケンサキイカ漁獲金額および単価

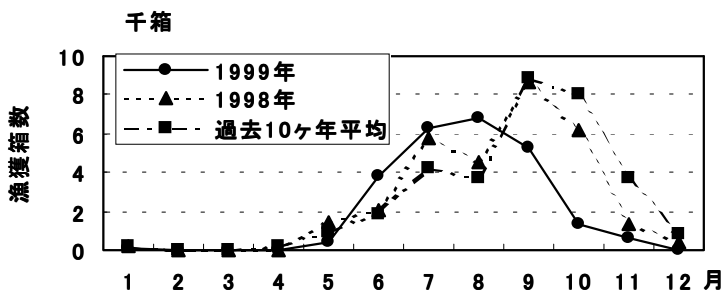


図12 浜田地元小型船によるケンサキイカの月別漁

1999年の島根県西部海域を主漁場としている小型イカ釣り船によるケンサキイカの漁獲動向を図10～12に示す。1999年のケンサキイカの漁獲箱数は24,674箱と、前年(30,694箱)の80%、平年(32,658箱)の76%とやや低調に推移した。CPUEは9.9箱で、前年(9.4箱)の106%、平年(8.7箱)の114%と前年および平年をやや上回った。漁獲金額は1億5,897万円で、前年(1億8,471万円)の86%、平年(2億1,679万円)の73%と漁獲箱数同様やや低調に推移した。また、単価は6,442円/箱で、前年(6,018円/箱)の107%、平年(7,209円/箱)の89%とほぼ平年並みで推移した。

ケンサキイカ漁獲量の経年変動は変動幅が大きく明瞭な傾向は見られないが、最近数年だけに注目すると1996年以降では3年連続で減少しており、今後の動向が注目される。また、月別の漁獲量を見ると、1999年は6～8月にかけて前年および平年を大きく上回る漁獲が見られたが、9月以降は急激に減少して

おり、漁期の開始時期および終了時期が平年に比べ1ヶ月程度早まっている。漁獲金額は多少のばらつきはあるものの2億円前後で推移していたが近年ではやや減少傾向にある。また、単価は1990～1993年では8,000～10,000円/箱前後であったがその後低下し、現在では5,000～6,000円/箱前後で推移している。

### 3. 沖合底びき網漁業

本漁業は東経 128 度以東の対馬周辺から日本海西部を漁場としており、8 月 16 日から翌年 5 月 31 日まで操業を行なう（なお、6 月 1 日から 8 月 15 日までは禁漁期間）。ここでは統計処理上、漁期年を用いる。1 漁期は 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までである。

#### (1) 全体の漁獲動向

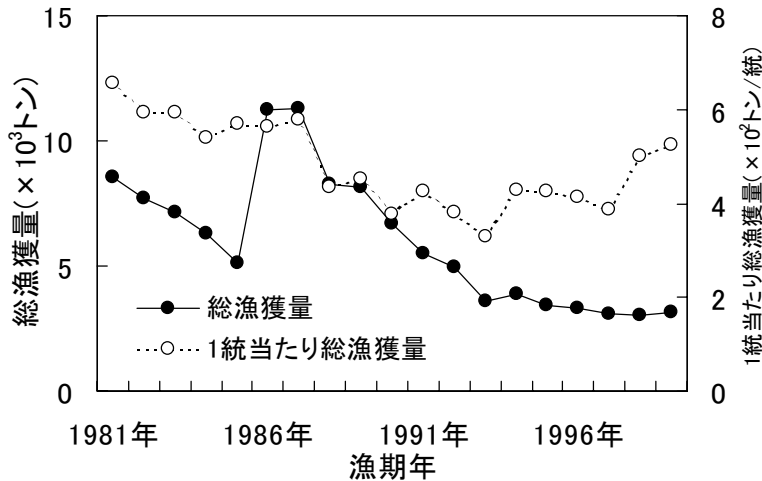


図 13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と 1 統当たり総漁獲量の経年変化。

図 13 に 1981 年以降の浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量（以下、CPUE という）の経年変化を示す。総漁獲量は、1981 年から 1985 年にかけて減少した後、1986 年に一時的に急増しているが、これはこの年 7 月に漁協統合が行なわれ、浜田市漁協所属の底びき船が増加したためである。その後、倒産、廃業および自主減船（1991 年）により稼働数が減少するとともに、総漁獲量も急激に減少した。1993 年以降は 3,000 トン前後で安定推移している。一方、CPUE は 1982 年から 1987 年にかけて 570 トン / 統前後で比較的安定的に推移していた。1988 年には一時急減したが、その後、1997 年にかけて年変動はあるものの 400 トン / 統前後で安定推移していた。1998 年、1999 年と増加傾向に転じ、500 トン / 統台まで回復した。

1999 年漁期は 6 統が操業し、総漁獲量は 3,150 トン、CPUE は前年を 3%、平年（1981 年～1997 年平均）を 11% 上回る 525 トン / 統であり、2 年続けて 500 トン / 統台を越えた。また、総水揚げ金額は 16 億 7,833 万円、CPUE は 2 億 7,972 万円 / 統で前年を 18%、平年を 34% 上回り、1981 年以降最高の水揚げとなった。

#### (2) 主要魚種の漁獲動向

##### カレイ類

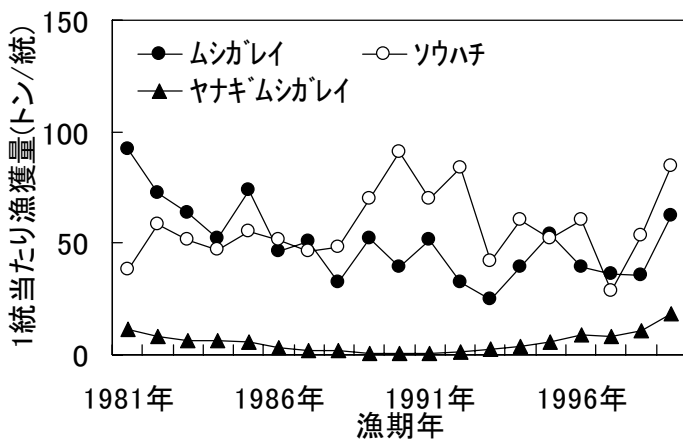


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網におけるカレイ類の 1 統当たり漁獲量の経年変化

図 14 にカレイ類の CPUE の経年変化を示す。ムシガレイの CPUE は 1981 年から 1988 年にかけて減少傾向にあった。1989 年以降、周期的な変動が見られるが、40 トン / 統前後で推移している。1999 年の漁獲量は 375 トン、CPUE は平年を 33% 上回る 52 トン / 統であった。ソウハチの CPUE は 1982 年から 1988 年にかけて 50 トン / 統前後で安定的に推移していた。その後、1990 年にかけて一

時的に急増しているが、これはこの年 7 月に漁協統合が行なわれ、浜田市漁協所属の底びき船が増加したためである。その後、倒産、廃業および自主減船（1991 年）により稼働数が減少するとともに、総漁獲量も急激に減少した。1993 年以降は 3,000 トン前後で安定推移している。一方、CPUE は 1982 年から 1987 年にかけて 570 トン / 統前後で比較的安定的に推移していた。1988 年には一時急減したが、その後、1997 年にかけて年変動はあるものの 400 トン / 統前後で安定推移していた。1998 年、1999 年と増加傾向に転じ、500 トン / 統台まで回復した。

時的な増加が見られた後、1990年を境に減少傾向にあったが、1998年、1999年と増加傾向に転じている。1999年の漁獲量は506トン、CPUEは84トン/統であり、1990年に次ぐ高い値となった。ヤナギムシガレイのCPUEは1981年以降減少傾向にあり、1990年には0.8トン/統まで落ち込んだ。その後、緩やかな増加傾向を示し、1998年には10トン/統を越えるまでに回復した。1999年の漁獲量は109トンで平年の2.1倍、CPUEは18トン/統で平年の4.1倍の水揚げがあり、1981年以降最高の水揚げであった。

イカ類

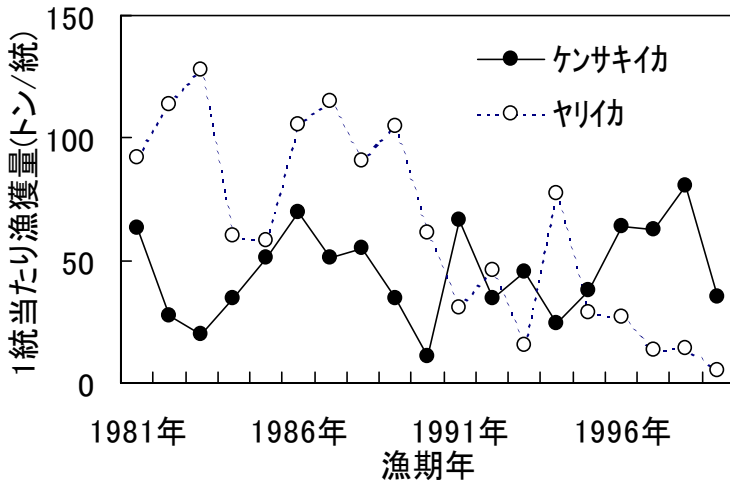


図15 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業におけるイカ類の1統当たり漁獲量の経年変化。

図15にイカ類のCPUEの経年変化を示す。ケンサキイカのCPUEは数年周期で増減が見られ、最近年は増加傾向にある。1999年の漁獲量は212トンで前年の半分以下の水揚げで、CPUEは35トン/統で平年の78%に留まった。一方、近年資源的に低水準状態にあるヤリイカのCPUEは増減が見られるが、長期的には減少傾向にある。1999年の漁獲量は32トンで1981年以降最低の水揚げとなった。CPUEは5トン/統で平年の8%の水揚げしかなく、1981年以降初めて1

桁台の漁獲となり、資源的にかなり危険な状況にあるものと推測される。

その他

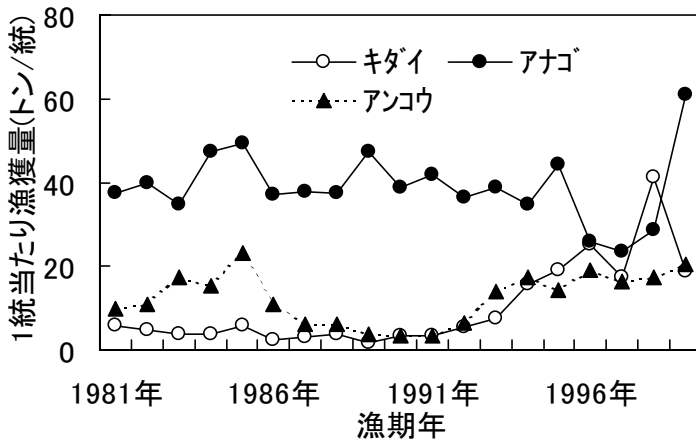


図16 浜田港と基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の1統当たり漁獲量の経年変化。

図16に沖合底びき網漁業で漁獲されるカレイ類、イカ類以外の主要魚種におけるCPUEの経年変化を示す。

キダイのCPUEは1981年から1989年にかけて漸減傾向にあったが、1992年以降は急激な増加傾向にある。1999年の漁獲量は112トンで前年を下回ったものの平年の24%増、CPUEは19トン/統で平年の90%増の水揚げがあった。アナゴのCPUEは1981年から1995年にかけて年変動は大きいものの、40トン/統前後で比較的安定的に推移していた。しかし、1996年に急減した後は25トン/統前後で推移している。1999年の漁獲量は前年の2.1倍の365トン、CPUEは61トン/統で前年の2.1倍、平年の1.6倍であり、1981年以降最高の水揚げとなった。アンコウのCPUEは周期的に変動しており、1980年代後半から1990年代前半にかけて増加した後は16トン/統前後で安定推移している。1999年の漁獲量は前年を18%上回る122トン、CPUEは20トン/統で前年を18%、平年を69%上回り、1985年に次ぐ高い値となった。